

「かえる会」のこと

——井上靖追悼——

古山 登

井上（靖）さんが亡くなられて（一九九一

年一月二十九日没）半年経った七月二十五日夜、銀座のバー「葡萄酒」で「かえる会」の「井上さんを偲ぶ夕」が催された。参加者は、会員十三名、客員会員三名、計十六名、最盛時には会員、準会員、客員会員の総勢が三十五名だったことを思うと、ずいぶん少くなつたものだなあという感慨が先に立つ。

「かえる会」とは、井上さん、山本（健吉）さん（文芸評論家、昭和63年没）を中心に、井上さんと親しい文学者、ジャーナリストが集まって作った穂高登山愛好グループとでもいったふうのもので、ナイロン・ザイルの性能・強度が社会問題に迄発展した井上さんの話題作「氷壁」が結成の機縁になった。

会名は、安川茂雄氏（アルピニスト、昭52年没）の案内で数人の親しい新聞記者たちと

井上さんが「氷壁」の主舞台となっている穂高に現地調査に出掛けた折、明神近くの池で目撃した何百という蛙の大群に由来している。この時の情景は、作品の七章（全十一章）に感慨深く描かれているが、長い冬眠から覚めた何百という蛙たちが一齐に地面を持ち上げようにして地上に飛び出して来る様は、さぞかし壮観であつたらう。

こういう成り立ちだから会の行事は「穂高行」ということで、それぞれのスケジュールを見ながら、福田宏年氏（独文学、中央大学教授）近藤信行氏（文芸評論家、元『海』編集長）高野昭氏（文芸家協会書記局長、元読売新聞文化部長）らが具体的な計画と設営を担当した。

パーティーの人数は大体三十名前後。先ず新宿駅に早朝集合、電車で松本へ。松本から

はタクシーに分乗して上高地へ向かい、上高地で岩稜会と合流して徳沢小屋目指して歩き出す。

岩稜会というのは、作中人物・魚津恭太として登場する「ナイロン・ザイル事件」の当事者・石原國利氏の所属する全国的なプロ登山家の団体で、石原氏と彼と親しい山仲間二人が客員会員として「かえる会」の行事には必ず参加した。

さて、徳沢小屋到着で第一日は終了。

二日目は朝食後徳沢小屋を出発して瀧沢たきざわに向かうのだが、この道程は相当に厳しく歩いて行くうちにパーティーは数百米に及ぶ長い縦列になった。先頭集団はベースメーカーの岩稜会・上岡謙一氏と福田、近藤、高野の各氏、それに学生時代に登山の経験のある比較的若い人たち、後尾集団は山本さん、杉森（久英）さん（作家）巖谷（大四）さん（文芸評論家）平山（信義）さん（元文芸家協会書記局長、元読売新聞文化部長）といった明治・大正初期生れの方々で、井上さんもこの集団の中に居た。そして、この後尾集団に歩調を合わせて護衛するのが岩稜会・伊藤経男氏、もう一人の岩稜会員・石原氏は先頭と後尾を行ったり来たり、パーティー全員に細か

く目を配っていた。

周辺の何れも三千米級の穂高連峯から見れば涸沢はほんの麓に過ぎないようだが、それでも標高二千三百余米の高地で空気は薄く軽い高山病に罹る者も少なくないと云われる程險しく、私なども、いつも目的地が近づくにつれ呼吸が苦しくなり、数歩歩いては足を止め呼吸を整えてから又歩き出すと云った工合で、その都度山登りの苦しさを味わわされたのだが、井上さんとは云えば、いつも殿の方を黙々と一歩々々踏みしめながら、矢張り休み休み歩いていった。

井上さんは「準備さえ万全であれば山登りはそれほど難しいものじゃない。ただど侮ると飛んでもない復讐に遭うことがある」と語ってくれたことがあったが、涸沢に向かう井上さんの姿にはそんな言葉を着実に実践しているように思われたし、また、山に対してばかりでなく、人間関係に就いて、文学に対して、更には人生そのものに対し井上さんは同じ信条で向かっていったように、私には思われる。全員無事に涸沢に辿り着いたところで二日目が終わる、小屋で一泊の後三日目は上高地に向かつて一気に下る。

上高地では、二日振りに旅館のちゃんとし

た風呂にゆったり漬かり、何かを成し遂げたという満足感に浸りながら打上げ宴に臨む。そして、深更まで賑やかに談笑に興じた後、翌日松本のレストラン「鯛萬」で再会することを約してパーティーを解散する。

最終日は自由行動、三々五々上高地を散策するグループもあれば前夜の深酒に頭を抱え宿でごろごろしている者も居ると云った工合で、松本で早めの夕食を摂った後電車で新宿に戻り、そこでその年の「かえる会」は完了するのだった。

「かえる会」のもう一つの楽しみは、例年七月と十二月の暑気払いと忘年会だった。

場所はお馴染みのバー「葡萄屋」で、店が休みの土曜の夕方から店を借り切って行われたが、井上さんにはこの集いが殊の他居心地が良かったらしく、宴は深夜に及ぶことが多かった。

尤も、年と共に進む老齢化のため、最後の上高地での打上げ宴となった昭和五十九年の前後十年程は山登りは無かったし、「葡萄屋」での会も井上さんが大きな手術をしたり山本さんが亡くなったりで途切れがちになっていたものだが、昨年七月、井上さんの強い提唱で「かえる会」最後の集いが行われた。その

時の井上さんは終始にこやかに会員一人々々の席を回って談笑していたが、数日來食物が咽喉を通らないのだという事で、憔悴し、嘗ての大酒豪がアルコール類は一滴も飲まなかった。或いは、井上さんは既にこの時自らの死を予感して「かえる会」の面々に別れを告げたかったのかも知れない。

「偲ぶ夕」が、一周忌を目途に一流ホテルの大宴会場を使って大々的に井上さんを「偲ぶ夕」という計画が大手出版社が中心になって進められているらしいとの噂を他所に、一周忌までに半歳を残してどんなに詰め込んでも五十人が精一杯という小さな酒場で催されたのはこんな背景があつてのことだった。そしてその夜は、取り立てて「井上さんを偲ぶ夕」という趣向はなく、静かに酒を飲み歓談することに終始、この種の会では司会者が矢鱈に指名し、指名された参会者は只管故人の遺徳を大袈裟に讃えるか、故人との親交がいかに深かったかを喧伝し、会場を白けさせるのが普通なの比べると誠に異例の「偲ぶ夕」になった。

しかし、参会者は皆「井上さんを偲ぶにはこんな形が一番相応わしい」という思いを持つたらし、満足した顔で散会したものだ。